

***射場天体観測所の7吋半屈折望遠鏡の対物レンズ(中村要製)を発見(?)**

アーカイブ新聞第703号で、射場観測所から1946年に東京天文台に寄贈された7吋半屈折望遠鏡(写真1)が1949年(昭和24年)の岐阜市での東京天文台の掩蔽観測に使用されたと思われる写真を発見(?)という記事を書いた。今回は、その7吋半屈折望遠鏡の対物レンズと思われるレンズ発見の記事である。このレンズ(写真2)は、天文情報センターが使っていたプレハブ倉庫から筆者が持ち出して、正体不明のレンズとして保管していたものである。このレンズについて詳細に調査をしなかったのは、あまりにも汚い姿かたちをしていたからである。今回、アーカイブ新聞第703号に射場観測所の7吋半屈折望遠鏡の記事を書き、その写真をよく眺めていたこともあり、棚に保管してある望遠鏡の対物レンズと思われていたレンズをふと眺めてみたところ、筒の太さは約20cm程度だし、7吋半屈折望遠鏡の先端に非常によく似ていることに気がついた。



写真1 射場観測所の7吋半屈折赤道義望遠鏡 写真2 発見されたレンズ

写真1の望遠鏡の先端の対物レンズ部分が写真2のレンズによく似ていることに気がつき、そのレンズの口径を測ってみると19cm(写真3)であった。7吋半は、まさに19cmである。



写真3 口径 19 cm と測定された

7 吋半屈折望遠鏡の焦点距離についての情報がないが、その姿から 2m 余りであろうと思われた。さて、焦点距離を測定するのも容易ではない。筆者は点光源からある程度の距離を置いて、このレンズを通った光が口径の 19 cm の平行光線になる位置を求めた(図 1)。

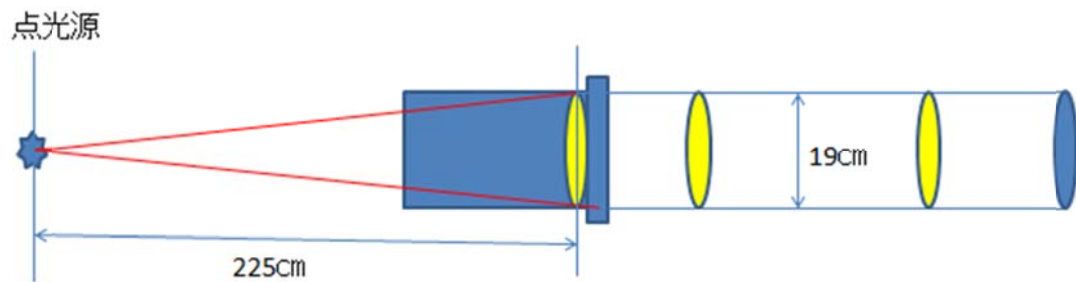


図1 レンズの焦点距離を求める方法

この方法で、発見されたレンズの焦点距離は約 225 cm と測定された。望遠鏡の写真からこの値は適当ではないかと思われる。非常にラフな測定であったから ± 5 cm の誤差があるにしてもこの値は写真から見る望遠鏡の焦点距離の値とみていいと思っている。

これで、この発見されたレンズが、射場天体観測所から 1946 年に寄贈された 7 吋半屈折赤道義望遠鏡の対物レンズと決めつけるには無理があるかもしれないが、東京天文台に遺された口径 19 cm、焦点距離 225 cm のレンズは、射場天体観測所から東京天文台に寄贈され

た望遠鏡の対物レンズの可能性はある。

もし、このレンズが射場天体観測所から東京天文台に寄贈された 7 吋半屈折望遠鏡の対物レンズならば、このレンズ(写真 4)はかの中村要によって研磨されたレンズということになるのである。これは日本における望遠鏡の歴史において非常に重要な発見と言えるのである。



写真 4 中村要が研磨した 7 吋半の対物レンズ (?)

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp